

山陽新聞夕刊 [一日一題] 【放浪】

「関心、感動、感謝」

岡山市病院事業管理者、岡山市立市民病院長 松本健五

学生時代。リュックひとつでの世界一人旅。夏休み、冬休みを利用して毎年数ヶ月6年間、世界各地を何でもみてやろうと歩きました。アジア、中近東、ヨーロッパ、大都市から小さな町までさまよいました。ある年はミュンヘン近くの小さな町のパッサウのドイツ語学校にも2ヶ月間留学、その後、旅を1ヶ月続けました。そのころは、日本人も少なく、珍しがられて声をよくかけられました。昼休み、校庭でアラブ人などに頼まれ、少林寺拳法の指導もしました。海外旅行、最初の地はタイ奥地のジャングル生活。クワイ河医学踏査隊の一員としてのものでした。すべてが新鮮でした。一人旅の始まりはその半年後の花の都パリ。凱旋門の前に立ったとき、幼いころからの夢の達成感と余りのうれしさに「今、この瞬間、自分はもう死んでもいい。あとはおつりの人生だ。」と感きわまり、心がふるえました。今でもあの感動は鮮明におぼえています。その後の人生がこんなに長いとはその時は思いませんでした。貧しい国、豊かな国を旅し、いろいろな人に会いました。不思議と貧しい国の人々の目は輝き、豊かな国になるほど人の目の輝きが失せて見えました。「言葉は違ってもみな一緒。人は物質的に恵まれても幸せになれない。食べて、寝て、出せるところ、そして夢と希望、感動する心さえあれば、幸せになれるのだ」ということを学びました。

卒業後、脳神経外科を専攻し、カリフォルニア大学（UCSF）留学も、旅の経験が生き、多くの友人もできました。感動する心は脳を老化させません。気持ち一つで若さを保てるのです。「関心、感動、感謝」が人生の三冠王。